

富山大学和漢診療学講座

～日本の伝統医学・漢方医学の研究・教育・診療～



富山大学医学部和漢診療学講座 教授

嶋田 豊

1982年、富山医科薬科大学医学部卒業。博士（医学）。
日本内科学会総合内科専門医。日本消化器病学会専門医。
日本東洋医学会漢方専門医。

沿革

富山大学杉谷キャンパス（医学部、薬学部、附属病院、和漢医薬学総合研究所）の前身である富山医科薬科大学は1975年に開学しましたが、建学の理念である「東西医学の融合」と「医学薬学の有機的連携」を具現化するため、1979年の附属病院開院とともに国立大学では初めて漢方診療を専門とする和漢診療室が設置されました。1983年に和漢診療部と名称変更し、1993年には医学部に和漢診療学講座が開講しました。また、2004年に附属病院和漢診療部は和漢診療科と名称変更しました。2005年に新しい富山大学となり、2006年には大学院の再編により大学院医学薬学教育部和漢診療学講座となりました。そして2019年10月には、教教分離の体制変更に伴い、医学部和漢診療学講座となりました。初代の教授は1990年1月に就任された寺澤捷年先生



富山大学杉谷キャンパス（医学部、薬学部、附属病院、和漢医薬学総合研究所）

で、2003年12月から嶋田豊が務めています。

教育

学部教育では、2年次に「和漢医薬学入門」を担当しています。これは医学部（医学科、看護学科）と薬学部（薬学科、創薬科学科）のすべての学生が受講する本学の特徴ある授業の一つです。その他、医学科で「和漢診療学」、「医学薬学史」、「臨床実習」、「選択制臨床実習」を担当しています。

大学院教育では、大学院医学薬学教育部修士課程医科学専攻で「東洋医学概論」をコーディネートしています。同専攻の「臨床医学概論」、修士課程看護学専攻の「臨床薬理学」の講義も担当しています。博士課程東西統合医学専攻では「和漢治療学特論」、「和漢薬の作用機構特論」、「大学院医学特別実習」を担当しています。講座開設から2018年度までの学位取得者は、博士（医学）75名、修士（医学）3名で、うち博士5名と修士1名は外国人留学生です。

研究

主に、漢方薬の微小循環改善作用、細胞・臓器保護作用、生体防御・免疫調整作用等に関する研究を行ってきました。2003年度から2007年度までの5年間、文部科学省研究拠点形成等補助金事業



富山大学附属病院

「21世紀COEプログラム」において「東洋の知に立脚した個の医療の創生」が採択されました。当初の拠点リーダーは寺澤先生で、2005年度から嶋田が務めました。最近の主な研究成果としては、基礎的研究成果に基づいて行ったオープンラベル・クロスオーバーデザインによる臨床試験によって、漢方方剤・帰脾湯がアルツハイマー病患者の認知機能を改善する可能性を示しました（Evid Based Complement Alternat Med. 2019; 4086749, 2019）。

診療

附属病院において、西洋医学（内科学）と東洋医学（漢方医学）の融合診療を行っており、医療用漢方製剤の他、生薬を用いた本格的な漢方治療も行っています。必要に応じて現代医学的な検査や治療も行い、院内の他の診療科とも連携をはかり診療にあたっています。来院する患者は、治療法の確立していない疾患、西洋医学的治療効果が十分でない疾患、副作



1st Joint Symposium of WHO Collaborating Centers for Traditional Medicine in SEARO and WPRO, Bangkok, Thailand (2019年9月13日)

用や多臓器疾患などで治療が困難な疾患などです。消化器疾患、呼吸器疾患、循環器疾患、リウマチ・膠原病、神経疾患、糖尿病などの内科疾患の他、皮膚科疾患、婦人科疾患、耳鼻咽喉科疾患、疼痛性疾患など様々な領域の疾患を対象としています。いわゆる冷え症や虚弱体質など、西洋医学ではあまり治療の対象とならない患者も多く受診されます。

WHO 協力センターとしての活動

富山大学和漢診療学講座は、1988年に世界保健機関（WHO）伝統医学協力センターに指定されました。4年毎に再指定され、現在も継続しています。現在の付託事項（Terms of Reference）は、伝統医学に関する医療安全、エビデンス、ならびに情報発信に関するものです。ここでは、漢方治療の医療安全に関する最近の活動について2つほど紹介します。

1つは、富山大学附属病院における漢方薬に関するインシデントレポートについて、10年間にわたり分析を行ったものです（BMC Complement Altern Med. 17: 547, 2017）。結果の一部ですが、漢方薬関連のインシデントは103件で、このうち99件は誤薬で、その内訳は投与エラー77件、調剤エラー15件、処方エラー7件で、残りの4件は薬物有害事象ですべて漢方薬による間質性肺炎に関するものでした。もう1つは、厚生労働省が公開している約15年間の副作用報告資料の中から医療用漢方製剤に関するものを抽出し分析を行ったものです（Evid Based Complement Alternat Med. 2019: 1643804, 2019）。主な結果ですが、合計4,232件のうち、肝障害関連1,193件（28.2%）、肺障害関連1,177件（27.8%）、偽アルドステロン症関連889件（21.0%）、腸間膜静脈硬化症関連223件（5.3%）、薬疹関連

185件（4.4%）、その他565件（13.3%）でありました。

情報発信を目的とした国際交流として、伝統医学協力センターに指定されている北里大学東洋医学総合研究所とともに韓国の伝統医学協力センターとの日韓WHO伝統医学協力センター・ジョイントシンポジウムをほぼ毎年行っています。2018年11月にソウルのキョンヒ大学での第7回シンポジウムでは、漢方薬関連のインシデントレポートについての報告を行いました。また、2019年9月には、バンコクでのnon-communicable diseasesに対する伝統医学の効果をテーマとした第1回SEARO・WPRO・WHO伝統医学協力センター・ジョイントシンポジウムにおいて、漢方方剤・桂枝茯苓丸のメタボリックシンドロームに関連した血管内皮機能障害に対する保護作用についての報告を行いました。